

俳句の部

堀口 みゆき

呂ナ禍により多数のイベントが中止になり、恒例の春季、秋季市民俳句大会、江ノ島春祭俳句大会もすべてキャンセル。誌面に載せる大会は一遍上人忌俳句大会の応募句のみとなりました。しかし「文芸ふじさわ」の俳句部門は昨年を上回る八十八名の応募があり、他部門に比べ俳句ブーム的な現象を感じます。言葉の短さに於ては川柳も同じですが、タレント等起用したメディアの影響も強いのかもしれません。ここで藤沢市の俳句の歴史を振返ってみますと、藤沢市は江の島をはじめ風光明媚といふこともあり明治時代から多くの俳人が吟行に訪れています。藤沢出身の俳人としては明治には永瀬覇天朗、小杉余子。小説家で俳人でもある夏目漱石や大正になつて芥川龍之介も江の島、鵠沼に滞在。現存していませんが東屋旅館は多くの文人が滞在したことで有名です。その後、昭和の戦後になつて藤沢俳句連盟や教育委員会共催の成人学校等が開校。S三四〇年藤沢市俳句協会結成。S三八年句集ふじさわ第一号。第四号まで刊行。その後S四二一年三月より「文芸ふじさわ」

第一集発行。(当初、隨筆、詩、短歌俳句。後に川柳、五行歌が参加) S四九年協会報「俳句ふじさわ」第一号が別途発行され現在も続いています。

今回も編集の際、気になる点がいくつありました。誤字、脱字。(2)文法の間違い。(3)新かな・旧かな混同。(4)字余り、字足らず(5)季語(無季、季重なり)(4)、(5)に関しては、意識して字余りにする場合もあります。特に上5の字余りは許されますし、効果的な場合もありますので。季語も無季の句や季重なりもあつてよいと思いますが、わからずに作られる方をお見受けします。最初は基本から入った方がよいと思います。(6)促音の表記。旧かな使用の方は促音(つまる音)例ええば、「きうて」を活字にする場合は、つの音を小文字ではなく「きうて」と大文字に表記します。新かな使用の方は小文字のまま表記。片仮名の表記は新旧問わず促音もそのまま小文字を使います。55集から初めて外国の方からの俳句の応募があり仏語と英語での俳句を日本語に翻訳することになりました。外国语で書かれた俳句は短詩に近いので訳者により原文と異なったものになってしまいます。ニュアンスを捉えながらの訳の難しさを感じました。今、俳句は多くの国で作られるようになつてきました。今後、日本の文化として俳句が国際的にも理解されることを願っております。

短歌の部

「高齢化と短歌」

太田 博

短歌人口の高齢化が叫ばれて久しい。文芸ふじさわ五十五集には、二十九名から短歌が寄せられた。その多くが高齢者である。作品は、身近や、家族、心のあり方、自然の風物などを詠つている。高齢化による老いは、例外なく誰にも訪れる。皆さんのは常にふれ、今号にも出詠したすこやかな歌にふれることは、編集者にとって望外の喜びである。

高齢化の波は、藤沢でも例外ではなく、昭和二十七年に発足した藤沢市民短歌会が昨年十一月解散し、七十年にわたった歴史を閉じた。また、地域の結社として多くの市民が参加していた歌誌「慶」も、ことし三月をもつて終刊となり、その活動にピリオドを打つた。そんななかで、継続発刊されている、「文芸ふじさわ」の存在は、短歌愛好者の作品発表の場として貴重な存在といえる。

私の短歌の師、宮柊一は「短歌は生の証明である」と

教えた。そのためか短歌愛好者は、概して長命である。八十歳、九十歳になつても、短歌を詠み続いている人が少なくない。

皆さんも健康でいつまでも短歌を愛し、詠み続けてほしいと私は願つてゐる。現役として、今も旺盛な短歌活動をしている歌人には、九十年代の岡野弘彦、春日眞木子（水甕）、尾崎左永子（星座）、馬場あき子（かりん）らがあり、総合歌誌の「短歌研究」や「短歌」を舞台に活躍し、作品を発表し続けている。

参考までに、すでに亡くなつた高齢歌人の作品を紹介する。亡くなる百歳まで歌を詠み続けた大御所、土屋文明（アラギ）歌誌青南の選者だつた清水房雄、九十年代まで作歌を続けた斎藤史、宮英子（コスマス）の歌を観賞する。

○いつの間に時のすぎたる手も足も我をはなれし如き日続きて
○街頭ライブとやらに立ちどまる下手と度胸に感心もして
○するすると夕闇くだり見て居れば他人の老いはなめらかに来る

（土屋文明）
(清水房雄)
(斎藤史)
○寒ければ早う寝よつと言ふひとなし雪降る夜半の午前一時すぎ

(宮英子)

川柳の部

宮塚 肇

誌へは投稿されていない。

新型コロナウィルスのパンデミックの真っただ中にある。

応募された四十八人の句にもコロナがテーマであるものが多かった。「コロナ」、「テレワーク」、「自粛」、「密」、「マスク」、「ゴートゥー」の表記の有無に関わらず從来とは異なる日常が詠まれている。俳句のように季語・切れ字など特別な決まりがなく創作ができ、主に人間の営みをテーマとする川柳である。短詩文芸として今こそ出番のかも知れない。

座の文芸を実現するサークル活動も制約を受けた。今は公民館でコロナ感染に留意しつつ川柳を楽しんでいる。とは言え、体調やコロナへの感度に個人差があり参加者が限定されることは致しかたない。その中で作句された「笑る声お昼は要るの要らない（よしのり）」に魅かれた。二月末からの一斉休校と在宅勤務とで子供も亭主も在宅している中での主婦の心情が良く分かる。表情や声までリアルに浮び頬が緩む。ユーモアと同時に時代の光景を捉え且つ穿ちも感じられる。時事川柳として、今しか通じない内容かもしれないが、不条理の時代を的確に切取った名句である。残念ながら本

彬のことが掲載されたことも特筆したい。現在のコロナとはスケールも性格も異なる不条理の大戦下、治安維持法違反で逮捕拘留中に病死した著名な川柳作家である。鶴彬は、川柳界の小林多喜二と言えよう。「手と足をもいだ丸太にしてかへし」。歴史に逆行してあの時代に戻ることがないことを願い掲載した大手新聞社に敬意と共に川柳を愛好するものとして喜ばしく誇らしく思う。

毎年九月、藤沢市教育委員会の後援を得てみらい創造財団との共催で市民会館を会場に藤沢川柳大会を開催している。本年は第三十四回となるが「密」を回避するために、急遽誌上大会に切換えた。実行委員の日頃の活動を通しての繋がりで開催通知が配布された。その結果、郵送の手書きもあり、北は北海道、南は沖縄まで例年のほぼ三倍、三百五十五人からの応募があった。まさに、藤沢地方区から全国区の大会に格上げである。参加者の中には川柳誌上でお名前を存じ上げているだけの有力な川柳作家もおられた。期せずして誌上で近くなることができて喜ばしい。コロナも少しは味なことをする。

(一一〇一〇年十二月記)

五行歌の部

橋本圭子

「文芸ふじさわ」第55集に五行歌をお寄せ頂き有難うございました。作品のモチーフは多岐に及ぶ中、今回はやはりコロナに関する歌が多く見受けられました。

令和二年は「輝かしいオリンピックの年」と信じて迎えたのでしたが、年明け早々正体不明の新型コロナ感染症に襲われ日本中がパニックに陥りました。日々増え続ける感染者に私達の日常生活も一変させられました。

「三密回避・外出自粛」の要請が出されるに至り、それまでは「集会形式」だった歌会を「紙上歌会」に変更し、リモートによる歌会を続けて参りました。五行歌を創ることは、自分自身の想いと置かれている現状を冷静に認識する一助になりました。コロナ関連の歌が多くなったのは必然です。五行歌を詠むことで日々のストレスを幾分か発散できだと感じています。

「紙上歌会」にも新たな利点がありましたが、市民会館が制限付きながら利用可能となつたのを機に、私達もガイドラインを守つての「通常歌会」に戻ること

ができました。

久しぶりの歌会は、（人と会つて話をし、笑顔になる）とが、心と体にどんなに大切なことか）を実感させてくれました。平凡な日常生活の貴重さと有難さに思いを致し、今はただコロナの終息を願うばかりです。

世界中に蔓延し、収束のメドさえ立たないコロナ禍。私達はまだその渦中に在ることを忘れず、用心しながら五行歌を詠み歌会を重ねて楽しく交流し、希望を持つて逞しく生きたいものです。

家に籠つても

元に戻れない

萎えた心と体に

喝を入れて

新しい日常を迎えに行こう

この混迷した時節にも関わらず、「文芸ふじさわ」を編集・発刊してくださった教育委員会・みらい創造財団の皆さまに心から感謝申し上げます。

現代詩の部

山田 美智子

文芸「ふじさわ」第五十五集を皆様のお手元にお届け致します。

新型コロナウイルス感染症に終始する一年を過ごし、なおも出口の見えない未知のウイルス禍の中にある非現実の生活が、新しい生活様式として私たちの日々の暮らしを大きく支配しています。平素より慣れ親しんだ自然の中で、新鮮な空気を頂きながら、疲れた心身をリフレッシュする事が、これからは規制や外出自粛等で難しくなる可能性があります。

このような現状のなかにあって、前作集より作品を投稿して頂きました皆様、そして今回若い世代の方々のご投稿を頂きました事に感謝致します。

新しい生活の中では、対人関係の希薄性や仮想現実を現実と見誤る等の感覚や意識の錯覚や混乱等が起きやすいと思われます。

そのなかにあり、ご自分の立ち位置を見誤ること無く、

ご自身の体験則から日常の諸事を見、ご自身の言葉で綴られた作品から、新たな想いの発見が心のなかに生まれる事は、ご自身を成長させる大事な行程であるともいえます。また、同じ仲間同士の作品を、紙面を通じて、読み手の立場から味わうのも良いと思います。

今回より、文芸を愛する方々への門戸を広くする意味合いからも、随筆が主となつていました市民の皆様への作品朗読の機会を、現代詩も四編ラジオ朗読をして頂ける様になりました。音読による間の取り方や声の高低、質感により作品のもつイメージが、作者の作品への想いと違つたり、受け取り手の受け取る作品のイメージが感覚的に変化をもたらすかもしれません、新たな試みとして、ご理解ご協力の程をお願い申し上げます。

さて、未知のウイルスは国内外を問わず、人類に大きな試練を与えている様に思います。

皆様もくれぐれも手洗いや消毒の手指衛生に留意され、無事に冬季を乗り越えられますように。次集でまた元気にお会い致しましょう。

隨筆の部

新田慎二

今回の応募作品の特徴は

・前号より応募作が増えて四〇作となつたこと

・完成度の高い作品が多く見られたこと

・「新型コロナウイルス」に触れたものが多くあつたこと

などがあげられます。応募作が増えたことは、継続投稿の方に加え、新しく文章を書くという面白い作業に挑戦された方が増えたことあります。私もこの仕事をお手伝いするようになつて十年以上になりますが、新規投稿数が増えて來てゐるのは、何より喜ばしいことです。この冊子の認知度が上がれば応募者は増えてきます。レディオ湘南やタウン誌の活用など、募集に当たつている事務局の方々のご努力が実つて來たものと敬意を表します。

思えば令和二年という年は、年初から新型コロナウイルスにかかり回された年でもありました。随筆とは「見聞きしたことや心に浮かんだことなどを気ままに

自由形式で書く文章」などと定義されていますが、応募作品の中にこの災厄が多く取り上げられているのも今号の特徴です。全体的には、みなさんそれぞれ自由に書いておられ、面白いテーマで見事に作品にまとめ上げています。

しかしながら作品を拝見して気づくことは、募集要項を守っていないものや、推敲不十分な作品があつたということです。この種の文章募集は多く企画されていますが、テーマや論旨は素晴らしいのに、字数オーバーや誤字脱字などがあると、それだけでボツになってしまいます。素晴らしい家具を作つてもサイズの不一致や、キズがあつては商品価値が失われてしまします。作品を読み返しチェックすることを心掛けてください。

また来年も、多くの皆さんが出「書く」ことに挑戦され、人生の記念となる作品を残され、他のジャンルも含め、この「文芸ふじさわ」がますます発展し藤沢市の重要な文芸誌となつてゆくことを期待しています。